

特集

新たな暮らしの選択肢を目指して

～ぱれっとの家 いこっとの7年間を検証し、
今後の課題を考える①～

2010年4月「ぱれっとの家 いこっと(以下、いこっと)」が誕生し、新たな暮らしの選択肢として多くの注目を浴びてきました。今回の特集では、いこっとを作った経緯を改めて振り返りまとめます。また、暮らしを通じた変化や想いなど、入居者と関係者の声を通してお届けします。

●いこっとができるまで

いこっとができる前、知的障がい者の8割以上が自宅で主に親の介助・支援を受けながら暮らしているか、グループホームやケアホームなどの入所施設で暮らしており、親や施設から自立して生活している方はごく少数であるという現状がありました(これは今も大きくは変わっていないと思われます)。しかし、ぱれっとは障がい者が軽度で身の回りのことが自立してでき、少しのサポートがあれば親や施設から自立した生活が十分可能な知的障がい者もいると考えました。ぱれっとのできるサポート、それが「共に暮らす“人”がいる家」をつくることでした。この考えに賛同して頂いた(株)東京木工所との協働により知的障がい者と健常者が共に住む新しいタイプの家をつくる、「ぱれっとの新しい家づくり計画」を2009年1月にスタートさせました。

新しい家づくり計画は、ぱれっとの職員だけではなく計画の主旨に賛同するボランティア、障がい者本人、親、入居希望者

新たな暮らし方の選択肢「ぱれっとの家 いこっと」がスタートして、この春丸7年を迎えようとしています。これまでの経緯や当初の思いを今一度振り返ると共に、共同生活を通じた課題など、2回の特集で見つめていきます。

が毎回15～20名集まって話し合うワークショップを月1～2回、計24回行ないました。そこでは「新しい家」での生活のイメージを出し合い、障がい者と健常者のイメージのギャップを把握し、不安な点や心配な点とその改善策を話し合いました。



「ぱれっとの新しい家づくり」
ワークショップの様子

また、建物についても設計者にワークショップに参加してもらい、共用部分や居室のこと、バリアフリーの考え方、水廻りの位置や数、内装の色等さまざまなことを設計や工事の進捗に合わせて話し合いました。そして入居開始予定の3か月前からは、入居希望者に集ってもらい入居者ミーティングを開きました。共に暮らす前に入居希望者が集まり、事前にお互いのことをよく知り、共に暮らしていくためのルールなどを話し合うなどしてスムーズな暮らしへとつなげることが目的でした。

このような話し合いを経て、2010年4月にいこっとは完成しました。また、ワークショップのメンバーの何人かは「いこっとサポートの会」として残り、現在もいこっとの運営をサポートしています。

(新しい家づくり計画実行委員長 高取正樹)

●いこっとの7年間

いこっとは2010年4月からの7年間で24名(内、障がい者8名)が暮らしてきました。いこっとは月1回の料理教室や年2回の大掃除、毎年恒例のクリスマス会など様々な企画を行なってきました。サポートの会では定期的にいこっとの運営が安定するために話し合いや勉強会、入居者や親との懇談会等の企画を行なってきました。

□2010年 入居希望者同士で事前に十分に話し合っただけのスタートとしましたが、生活が安定しない日々が続きました。入居者同士のルールも毎月決めていき、いこっとの生活の基盤を固めていきました。

□2011年 アジア知的障害会議で入居者がいこっについて語ったり、いこっ1周年記念の対外向けのシンポジウムやブログを開始したりして外部発信を多く行なってきました。

□2012年 スタートから2年が経ち入居者同士が仲良くなる一方で、お互い生活する上で譲れない部分が出てしまい、共同生活の難しさを実感する年でもありました。

□2013年 入居者もスタート時から半分以上入れ替わり、いこっのルールも入居者の生活スタイルに変更してスタート当時とはまた違う生活が始まりました。

□2014年 入居者の退去も少なく、生活が安定した年となりました。5年目を迎え、いこっで起きた様々な事例を振り返りサポートの会で半年にわたり勉強会を開きました。

□2015年 5周年を迎え入居者にヒアリングを行ないました。また、入居者が企画して5周年記念パーティーを開催し、関係者等大勢の人が参加しました。

□2016年 年度の変わり目で入居者の半近く入れ替わりました。そのため、新しい入居者同士のよりよい人間関係の構築についてどうすればよいか長い時間話し合いを行ないました。

(いこっサポートの会 稲沢憲)



【いこ間に
現在暮らしている皆さん】

●いこっでの生活

いこっに入居して間もない人は、他人との共同生活への緊張感があります。楽しいことがたくさんあると想像して入居した人は、ワクワク感から自分の個室といこっの居間(通称:いこ間)を何度も往復したり、逆に他人とどう接してよいのかがわからず玄関から個室まで駆け込んでいた人もありました。しかし、どんな人も時間が経つうちに慣れてきて、自然に一緒に居られるようになります。

いこっではお掃除やゴミ捨てるの当番など様々なルールがありますが、いこっでの生活が長い人は、入居して間もない人にルールを教える役割を積極的に担っています。最初は遠慮がちだった人も、慣れてくると月1回のミーティングの司会を積極的に担当したり、自主的にイベントを企画したりするなど、様々な経験を積む中で人それぞれ成長があります。また、入居もあれば退去もあり、出会いと別れがあります。ともに生活してきた人の退去については様々な受けとめ方があり、いこっでの共同生活は、人間関係を学ぶことにつながっています。(入居者 河原由香里)

●入居者の声

①2016年8月に入居して、約4カ月が過ぎました。最初は慣れないことも多く、大変な思いがしました。しかし、今では慣れてきて、特に困っていることはありません。ごみ当番や、自分で朝と晩の食事の準備をしたり、片づけをすることなどに慣れてきて、すらすらできるようになりました。いこつとでの生活に満足しています。いこつとで一番楽しいのは、月1回のミーティングの後に入居者のみなでお食事会をすることです。(入居者：車和則)

②いこつとに住もうと思ったのは、自分にとって新しいチャレンジになると思ったからです。見知らぬ人たちとの共同生活をいかに楽しいものに作り上げていくか。年代や性別、障がいの有無など多様な中で、コミュニケーションを図りながら課題を乗り越えていくプロセス自体が貴重な体験となりました。様々な場面を分かち合い、生活を共にしてきた仲間たちは一生の財産となります。今でも一緒に住んでいた人と会ったときは「あの時はこうだったね」と笑いながら話に花を咲かせていて、退去後も続く人間関係を嬉しく思っています。

(元入居者：松村昂明)

③入居した時は、いこつとでのルールや部屋のそうじ、せんたくをする時間が決められていて窮屈なところがあったけれど、徐々に慣れました。ご飯は最初、他に食べる人のことを考えて遠慮して、他の入居者に「やせてしまってどうしたの?」と心配かけたけど、おかずの種類や韓国チヂミなど作って、量を増しました。カラオケや外食、入居者の知人などを招いてのイベントやいろんなパーティーなどが楽しかったです。(元入居者：渡辺幹夫)

●いこつとのこれから

新しい事業を進めるにあたり、運営をする立場として考えられる課題は以下のよう想定していました。

第一にこの事業は補助金や助成金を恒常的に得ている訳ではないため、継続のための運営資金は自分たちで獲得しなければならないことです。いこつとの運営における収入は、ほとんど全てが入居者から得る家賃です。そのため、常に8室すべてに入居者がいることが、運営的に望ましい状態となります。

次に、入居者同士のコミュニケーションがあります。ひとつ屋根の下で生活することは簡単なことではありません。入居者同士は家族ではなく、立場も異なるためコミュニケーションを積極的に取る必要があります。しかし、仕事を持った入居者は帰りが遅くなることもあり、どのように円滑なコミュニケーションを取っていくのかは悩ましいところです。

最後に、ぱれつとが考える新しい生活のあり方や事業が社会に広がっていくかどうかです。ぱれつとが第二、第三のいこつとを全国展開していくのではなく、いこつとの取組みを発信することで全国に新しい住まい方の広がりを生み出していく方法が課題です。

「障がいのある人となない人が共に生活する家をつくる事業」において、これらの課題に対しどのような挑戦をしているのか、次号も特集を組み様々な立場の人の意見・考え・思いを紹介しながらいこつとの運営を考えていきます。

(いこつとサポートの会/

認定NPO法人ぱれつと理事 田口雄一)

【入居者募集】『私も暮らしてみたい!』と思った方は、23ページの「入居者募集」をご覧ください。お待ちしております!